

# イライジャ - ナンバー・セブン

## 最初と最後

Jeff Pippenger

2023-10-07

私たちは、1844年の大失望を発端に始まった一連の試練における最後の試金石として、1863年を位置づけている。第一の論拠は、まさにその年にセブンスデー・アドベンチスト教会が米国政府に法的に登録された時点で、ミラー派運動が終わったという事実である。1798年に預言的に始まったその運動は、1863年に終わった。

靈感は、2001年9月11日に黙示録18章の力ある御使いが下ってきたとき、その出来事が、黙示録10章の御使いが下ってきたときのミラー派運動において予表されていたことを私たちに教えている。ミラー派の運動は、終わりの時である1798年に始まった。そのとき、ダニエル書8章と9章のウライ川の幻の封印が解かれた。十四万四千人の運動は、終わりの時である1989年に始まった。そのとき、ダニエル書の最後の三章にあるヒツデケル川の幻の封印が解かれた。

両方の終わりの時は、それぞれの歴史の運動の中にいる者たちから、かつての選民を漸進的に切り離し始めた。それぞれの歴史の主要な規則が公に確認されたとき、各々の歴史の天使が降りてきた。メッセージ、運動、そして使者は、それぞれの歴史において、かつての選民の罪を示すために主が用いられた器であった。というのも、キリストがご自身の御業について教えられたとおり、もし彼が来なかったなら、歴史上の難癖をつけるユダヤ人には罪はなかったであろうからである。使者、メッセージ、運動は、それぞれの歴史における漸進的な光を拒んだことについて、かつての選民に責任を負わせる裁きの器であり、天使が降りたとき、それは、かつての契約の民の裁きの過程が進行中であることを示した。その歴史を例証する預言者たちが、主によって彼らに与えられたメッセージを食べるとき、裁きの器が明らかにされる。彼らはそのメッセージを食べると、彼らはそのメッセージを、強情で反逆的な民として描かれるかつての選民のもとへ携えて行くが、彼らは耳を貸さず、悔い改めて立ち返ることはない。ひとたび天使が降り、メッセージが食べられると、反逆の民に対する裁きが始まる。

私たちは、民数記に示されている古代イスラエルにおける裁きの過程をミラー派運動の歴史に適用しており、最終的にはこの検証の過程を十四万四千人の運動にも適用します。『十』という数の象徴的意味は、それが用いられている箇所文脈によって定まります。

十の試練の連続は、失望から始まる。古代イスラエルにとっては紅海で、ミラー派にとっては1844年10月22日である。ホワイト姉妹は、その時に開かれた「道標となる」真理を、彼女が「時の経過」と呼んだものから始めて特定している。ヘブライ人にとっての失望は、ファラオの軍勢の脅威であった。神の力への信頼の欠如は、敵の軍勢を恐れるあまり示した振る舞いのうちに現れたが、それは第十、すなわち最後の試練のときと同様であった。イエスは初めから終わりを示されるので、十人の斥候が約束の地で指摘した巨人たちへの恐れは、紅海のほとりで彼らに失望を生じさせたのと同じ恐れであった。ミラー派運

動にとっての第十にして最後の試練は、1844年10月22日がそうであったように、時の預言である。

ミラー派の歴史における漸進的な試練の中での「大失望」は、古代イスラエルの出エジプトによって明確に予表されていた歴史の始まりを画した。紅海から始まって十の試練が続き、最後の試練は最初の試練を反映するものとなった。「大失望」における「時の経過」は、「時の預言」の誤解によって生じた。霊的イスラエルに対する試みの過程の最後は、最初と同じものとなる。1863年、肉的イスラエルの指導者たちは、自分たちがちょうど「ローマの娘たち」と認定した人々の聖書解釈の方法に立ち戻ることを選び、聖書の中で最も長い時の預言を退け、言い換えれば、誤解した。肉的イスラエルと霊的イスラエルの双方において、十の試練の終わりは、その始まりによって表されていた。そして終わりにおいては、いずれの場合にも、反逆者たちは、たった今解放されたばかりの場所へ戻りたいという願望をあらわにした。

ラオデキア的アドベンティズムは、レビ記26章の「七たび」を退けたことによって、彼らが予期していなかった預言的ジレンマを生み出した。今日に至るまで、彼らはそのジレンマを解決できていないが、解決しようとしてありとあらゆる作り話を並べ立てている。そのジレンマは、ホワイト夫人がアドベンティズムの基礎であり中心となる柱であると認めている聖句の中にある。

再臨信仰の土台であり中心の柱として、何よりも重んじられてきた聖句は、「二千三百日まで、そのとき、聖所は清められる。」という宣言であった。〔ダニエル書 8:14〕 『大争闘』 409ページ。

アドベンチスト派は第十四節について多くを語るが、その節についてまず何より指摘すべき第一の点には決して触れない。その指摘とは、第十四節が「答え」であるということだ。答えというものは、それを引き出した問いが伴わなければ無意味だ。第十三節は第十四節と、論理的にも文法的にも、そして道理の上からも切り離すことはできない。というのも、第十三節が問いであり、第十四節がその答えだからである。

その問いは、正しく公正に提示されるなら、アドベンティズムが教えるものとは大きく異なる意味を十四節にもたらす。だからといって、十四節が「再臨信仰の基礎であり中心の柱」でないというわけではない。実際にそうである。問題は、アドベンティズムが1863年に「七つの時」を誤解して退けたとき、十四節が真に意味するところを完全には定義できなくなったということだ。聖書において半真理は真理ではない。正しく理解すれば、十三節の問いは、踏みにじられていた聖所のきよめを示す預言の認識と、軍勢が踏みにじられることを示す預言の認識の双方を求める。二千三百年の預言は「聖所」を扱い、二千五百二十年の預言は「軍勢」を扱う。

この二つの節の関係を論じるには詳細な検討が必要ですが、現時点のこれらの記事ではそれを行うつもりはありません。これらの点については長年にわたり繰り返し取り上げており、シリーズ『Habakkuk's Tables』に見いだせます。私はなおエリヤの象徴性を扱っており、まずはそれらの真理を仕上げたいと考えています。

ウィリアム・ミラーはアドベンチズムの始まりにおけるエリヤであり、彼の最初の発見はレビ記26章の「七つの時」であった。ゆえに、1863年にその真理を退けたことは、エリヤのメッセージを退けたことだった。ここで私は、終わりを初めと同一視する「アルファとオメガ」の特質に言及している。古代イスラエルにとっての最終の試練は、最初の試練のうちに表されていた。どちらの試練も、異邦の国々が神よりも強いのではないかという恐れを表している。第十の試練は原則においては同じであったが、最初の試練よりはるかに反抗的であった。というのも、最初の試練における神の勝利の歴史が、反逆者たちのうちに確固たる信頼を生み出しているはずだったからである。彼らは、紅海の時に持っていたよりもはるかに多くの御力の証拠が与えられていたにもかかわらず、神を拒むことをあらわにした。1863年までに、ミラー派アドベンチズムは、大失望がなぜ神の力強い御業であったのかを既に説明していたが、彼らはなおも隊長を立ててエジプトへ帰ろうと決め、エリヤによって表され、ダニエルが「モーセの誓い」と呼ぶメッセージを拒んだ。

七つの時が時の預言として妥当であることの証拠を提示することに時間を費やすのではなく、私は別の方法でその妥当性を証明するために、いくつかの簡単な論法を用いるつもりである。1798年に始まった運動における1863年の最終試練は、黙示録18章の力ある御使いの運動にとっての最終試練もまた表していることになる。靈感は、両方の運動にとって最終試練が何であるかを非常に明確に示してきた。

「サタンは……偽りのものを絶えず持ち込み、真理から引き離そうとしている。サタンの最後の欺きは、神の御霊の証しを無効にすることである。『幻がなければ、民は滅びる』（箴言29:18）。」『セレクトッド・メッセージズ』第1巻、48ページ。

エレン・ホワイトの著作を正直に読むなら、彼女がレビ記26章の「七つの時」を全面的に支持していなかったなどとは言えない。これらの記事で既に示したとおり、また『ハバククの表』と題する連載で十分に記録されているように、ホワイト夫人は、神が1843年と1850年の両方の図表を導かれたことを私たちに直接教えている。彼女は、その二つの表がハバクク書2章の成就であったと直接教えている。両方の図表は、それぞれの図式において、レビ記26章の「七つの時」を中心に据えている。両図表において、「七つの時」という預言の線の中心にキリストの十字架が置かれている。

彼女はハバククの二つの表を支持するとともに、1840年から1844年にかけて伝えられたメッセージを私たちが引き続き伝えるべきであることを、たびたび記録している。また、ミラー派が自らのメッセージをどのように広めたかを論じるすべてのアドベンチストの歴史家は、彼らが1843年の表を用いたことを指摘している。彼女はその表に表されているメッセージを支持し、神の民に対して、その歴史の中で伝えられたのとまったく同じメッセージを引き続き伝えるよう勧めているだけでなく、神の残りの民の歴史を通じてそれらのメッセージが攻撃されるだろうと警告する箇所を複数示している。彼女はそれらの攻撃について警告する際、まさにその真理を擁護することが神の見張り人の務めであると繰り返し明言している。

もしその図表が誤っているなら、それらが視覚的に示しているメッセージも誤っている。1840年から1844年にかけてミラー派が宣べ伝えたメッセージが誤りであったなら、ミラー派のメッセージを土台であると繰り返し位置づけたエレン・ホワイトの主張もまた誤

りである。もしそれらのメッセージが誤りであったなら、その同じ真理を引き続き提示するよう繰り返し勧めた彼女の勧告は誤ったものとなる。もしミラー派のメッセージが、サタンの攻撃から守り保存すべき土台を表していないのであれば、それらの勧告もまた誤りである。当時のエリヤのメッセージに関連するこれらすべての事柄が誤りであるという結論に達することは、エレン・ホワイトが偽預言者であったことを明白に示すことになる。

現代のアドベンチズムは、彼らの黙示録セミナーで、残りの者の教会はイエスの証しである預言の霊を備えていると今も教えています。しかし、教会員として加えようとしている人々には、初期の基礎的真理と歴史に関連してエレン・ホワイトが示した支持と警告を自分たちが完全に退けていることを、決して伝えません。次の一節はあなたにとってどのような意味がありますか？

将来を恐れる理由は何もない。ただし、主がこれまで私たちを導いてこられた道と、過去の歴史における主の教えを忘れてしまうときは別である。『Life Sketches』196頁

1863年、ミラー派運動は結論に達し、最終的に教皇制の像を形成することになる政府に対して、法人として登録した。エレン・ホワイトの定義によれば、それは教会と国家の結合である。

アメリカ合衆国で、教会の制度や慣行に国家の支持を確保しようと現在進行している運動において、プロテスタントは教皇派の後を追っている。いやそれどころか、彼らは、旧世界で失った至上権をプロテスタントのアメリカにおいて教皇権が回復するための扉を開いている。『The Great Controversy』573頁

政府との法的な結びつきが組織化に必要なものの一歩であるという前提のもと、南北戦争という流血の惨事へと国の若者たちが徴兵されていた時代に、ミラー派の運動は終わりを迎えた。1863年、セブンスデー・アドベンチスト教会は、印刷された記事と新しい表の双方において、ダニエルがモーセの誓いと呼ぶ奴隷制の預言を退けた。1850年に、主はご自分の民にハバクク書の第二の表を作り、1843年の表においてご自身がその御手で覆っておられた誤りを正すよう導かれた。1850年に命じられたその表は、その目的を完全に果たした。というのも、エレン・ホワイトは「神がその表の刊行におられたのを見た」と述べるとともに、その1850年の表がハバクク書2章に示されているものだと指摘しているからである。

1850年の図表の目的は、1843年の図表と同じであった。それは、滅びゆく世界に第三天使のメッセージを伝えるために用いられる伝道の道具となるはずのものだった。1863年には、そのメッセージは退けられた。紅海で始まった試練の過程によって象徴されている試練の過程は、ダニエル書8章13節で踏みにじられるとされている聖所を指し示す時の預言から始まり、同節で踏みにじられるとされている軍勢を指し示す時の預言で終わった。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

1844年10月22日に始まった試練の過程には、アルファとオメガの印がある。その試練の過程の始まりは、踏みにじられるはずの聖所を表す時の預言であった。それは成就したとき大いなる光をもたらした預言であった。1863年に終わったその試練の過程にも、アルファとオメガの印がある。その試練の過程の終わりは、踏みにじられるはずの軍勢を表す時の預言であった。それは成就したとき大いなる光をもたらすよう意図された預言であった。それはその歴史におけるエリヤによって示された時の預言であり、それが拒まれて脇に退けられたとき、大いなる闇を生み出した。

そして、裁きとはこうである。光がこの世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇を愛した。ヨハネ 3:19。

本稿の結びに用いる論理は、すでに述べたとおりだ。神はエレン・ホワイトを通して1843年と1850年の図表を承認したのか？

私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、変更してはならないこと、また、数字は主が望まれたとおりであったこと、さらに、御手がある上を覆っていくつかの数字の中にある一つの誤りを隠し、御手が取り去られるまで誰にもそれが見えなかったことを見た。『初期の著作』74頁。

私は、ニコルズ兄弟による図表の出版には神が関わっておられたのを見た。私は、この図表についての預言が聖書にあるのを見た。そして、この図表が神の民のために備えられたものであるなら、もしそれが一人にとって十分であるなら他の者にとっても十分であり、もし誰か一人がより大判に描き直された新しい図表を必要とするなら、皆も同様にそれを必要とするのである。『Manuscript Releases』第13号、359、1853年。

神は、エレン・ホワイトを通して、1840年から1844年にかけてミラー派が唱えたメッセージを支持しましたか？

「神は私たちに新しいメッセージを与えておられるのではありません。私たちは、1843年と1844年に私たちを他の教会から引き出したそのメッセージを宣べ伝えるべきです。」『レビュー・アンド・ヘラルド』1905年1月19日。

「神は、1843年と1844年に男女の心を動かしたメッセージを人々に宣べ伝える働きに、私たちの時間と力を捧げるよう命じておられる。」『マニユスクリプト・リリース』第760号。

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見えているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分に立って、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

「1841年、42年、43年、44年に私たちが受けた真理は、今や研究され、宣べ伝えられるべきである。第一、第二、第三の天使のメッセージは、将来、大きな声で宣べ伝えられるであろう。それらは、熱心な決意をもって、また聖霊の力によって与えられるであろう。」『Manuscript Releases』第15巻、371頁。

「私たちは、現在の働きがどれほど弱く小さいかを理解しています。私たちは経験してきました。神が私たちに与えてくださった働きを行うにあたり、神が私たちの力となってくださることを確信し、信頼して前進してよいのです。神は、1841年、1842年、1843年、1844年に私たちと共にいてくださったように、1906年にも私たちと共にいてくださいます。」Loma Linda Messages, 156.

私たちの諸機関で教師や指導者として立つ者は、信仰において、また第三天使のメッセージの原則において健全でなければならない。神は、ご自分の民が、1843年と1844年に神が私たちにお与えになったとおりのメッセージを、私たちが持っていることを知るよう望んでおられる。General Conference Bulletin, 1903年4月1日。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

神はエレン・ホワイトを通して、ミラー派の歴史に関する真理を揺るがすような攻撃に対して防御するよう、ご自分の民に警告されたのですか。

預言の歴史における私たちの針路を示す真理の偉大な道標は、取り壊され、真の光ではなく混乱をもたらす理論に置き換えられることのないよう、細心の注意をもって守られなければならない。Selected Messages, book 2, 101, 102.

今日、サタンは真理の道標-これまでの道のりに沿って築き上げられてきた記念碑-を打ち壊そうと機会をうかがっている。そして私たちには、堅い岩の上に家を建て、悪評のときにも好評のときにも真理に堅く立ち続けてきた年配の働き人たちの経験が必要である。Gospel Workers, 104.

神は、善と悪、義と不義を見分けることのできる人々をこの世から決して絶やされない。神は、非常時に戦いの最前線に立つようお定めになった人々を備えておられる。危機に際しては、昔そうされたように、神は人々を起こされる。若者たちは年老いた旗

手たちと結び合うよう招かれ、数多くの戦いをくぐり抜けてきたこれらの忠実な者たちの経験によって力づけられ、教えられるであろう。神は、その御霊の証しを通して彼らに幾度も語りかけ、正しい道を示し、誤った道を戒めてこられた。神の民の信仰を試す危難が生じるとき、これらの先駆の働き人たちは、過去の経験、すなわち、まさにそのような危機が到来し、真理が疑問視され、神から出たものではない奇妙な思想が持ち込まれた時のことを、語り伝えるのである。

今こそ、その年配の働き手たちの経験が必要である。というのも、サタンは、古い道標-道すがら打ち立てられてきた記念碑-を取るに足らぬものにしようと、あらゆる機会をうかがっているからである。Review and Herald, 1903年11月19日。

1863年、ミラー派運動は、その歴史のエリヤが導かれて理解していた第一の真理を退けることで終わった。その最終の試練は、聖所と軍勢が踏みにじられることを示すダニエル書8章の二つの節に基づいていた。十の試練の最初に聖所の光が明らかにされ、十の試練の最後に軍勢の上に闇がもたらされた。

ただ一つ確かなことは、サタンの旗印の下に立つセブンスデー・アドベンチストは、まず、神の霊の証しに含まれている警告と戒めを信じる信仰を捨てるということだ。

より深い献身と、いっそう聖なる奉仕への召しが発せられており、今後も発せられ続ける。今、サタンの示唆を口にして人々の中には、やがて我に返る者もいる。信頼を託された要職にありながら、この時のための真理を理解していない者たちがいる。彼らにこそ、そのメッセージを伝えなければならない。彼らがそれを受け入れるなら、キリストは彼らを受け入れ、ご自身と共に働く者とする。しかし、そのメッセージを聞くことを拒むなら、彼らは暗黒の君の黒旗の下に立つことになる。

私は、この時のための尊い真理が人の心にますます明確に開かれている、と告げるよう指示を受けています。特別な意味において、男女はキリストの肉を食べ、その血を飲むべきです。真理は絶えず拡大し得るので、理解は発展していくでしょう。真理の源である神は、彼を知ろうと追い求める者たちと、ますます親しい交わりに入ってください。神の民が天からのパンとして神の言葉を受けるとき、彼の出現は暁のように確かであることを知るでしょう。人が食物を食べて肉体の力を得るように、彼らは霊的な力を受けるのです。

私たちは、主がイスラエルの子らをエジプトの奴隷の身から連れ出し、荒野を通過してカナンへ導いたご計画を、半分も理解していません。

福音から輝き出る神の光を集めるなら、私たちはユダヤの制度をいっそう明確に洞察し、その重要な真理をより深く理解するようになるだろう。私たちの真理の探求はまだ完成していない。私たちはほんのわずかな光の筋を拾い集めただけである。日々御言葉を学ぶ者でないなら、ユダヤの制度の諸問題を解き明かすことはできない。彼らは神殿の奉仕によって教えられている真理を理解することはできない。神の偉大なご計画を世俗的に理解することが、神の働きを妨げている。雲の柱に包まれておられたキリストがその民に与えられた律法の意味は、来るべき世で明らかにされるだろう。Spalding and Magan, 305, 306.

次の記事では、1863年に関連してエリヤの象徴についての考察を続けます。

